

3	瀬戸	幡山東小学校	ほその なぎさ 氏名 細野 渚
分科会番号	6	分科会名	生活科教育

研究主題

様々な対象と関わり、気付きの質を高める生活科
 — 1年「たのしい あき いっぱい」の実践を通して —

1 はじめに

学習指導要領生活科解説編では、気付きの質を高めるとは、「無自覚だった気付きが自覚されたり、一人一人に生まれた個別の気付きが関連付けられたり、対象のみならず自分自身についての気付きが生まれたりすること」と示している。具体的な活動や体験を通して、自分と友達の存在やよさ、自分の成長に気付くことが、自分自身への気付きに繋がっていく。私たちは、子どもたちが自分自身について気付くことができるように、学習支援を行っていくことが求められている。

そこで今回は、1年生を対象とし研究を行っていく。本学級の子どもは、個性豊かで明るい。休み時間は外へ遊びに出かける子どもが多く、自然に触れあったり、気の合う友達と遊んだりする姿をよく見かける。身の回りの色んなことに興味をもち、探究したい気持ちを強くもっている反面、まだ集団として上手く人間関係を形成できない子どもが多くいる。子どもたちはそれぞれよさがあり、輝ける面を持っているが、現状ではそれが発揮される場面は少ない。本学級では、学級目標として「いいね！」を掲げている。友達や自分のよいところを「いいね！」と認めて、伝え合えるようになってほしいという教師の願いが込められている。「自分のよさを知り、友達のよさを認めることができる」ことは、本研究で目指す「自分自身への気付き」まで質が高まった姿である。生活科学習を通して様々な対象と関わる場をもてば、「自分のよさを知り、友達のよさを認める」姿に迫ることができるのではないかと考え、本研究を行うことにした。

2 研究の仮説

秋を楽しむ単元において、様々な対象と関われる場をもてば、自分自身について気付くことができるだろう。

3 研究の手立て

仮説にある「自分自身について気付く」とは、①集団生活になじみ、集団における自分の存在に気付くこと②自分のよさや得意としていること、また興味・関心をもっていることなどに気付くこと③自分の心身の成長に気付くことの3点が、学習指導要領生活科解説編の中で述べられている。本研究では、自分自身についての気付きまで気付きの質を高めていけるように、3つの関わりの方を設定する。

手立て① 自然物と関わる場の設定

秋の自然物を扱って授業を進めていく。子どもたちが通い慣れている学校の中や通学路にある秋の自然を、直接見て・触って感じられるように体験活動を繰り返し行い、表現活動を行う。

手立て② 友達と関わる場の設定

単元を通して、友達と関わる場を多く設定する。4月からこれまで、対象—自分の関わりが多かったが、今回は班活動や友達と自由に関わるができる時間を多く設けることで、友達のよいところに気付き、自分のよいところやできることに気付かせたい。個人の活動を踏まえて、班での活動を行うことにより、より自分自身について気付くことができるようにする。

手立て③ 6年生と関わる場の設定

本研究では、最後に行く「あきまつり」で日頃お世話になっている6年生を招待し、関わる場をもつ。6年生には入学当初からお世話になっているため、子どもたちの学校生活には欠かせない存在になっている。そのような憧れの6年生を喜ばせ、感謝の気持ちを伝える場があれば、子どもたちは張り切って準備し、活動すると考える。6年生のために準備する自分たちの姿や、あきまつりの振り返りなどから、自分自身について気付くことができるようにする。

4 活動計画（24時間完了）

第1次	あきを見つけよう		手立て①②
	第1時	夏と秋の境目はどこだろう	
	第2時	校庭で秋を見つけよう	
	第3時	校庭で見つけた秋を伝え合おう 「3くみ はたとうあきじまん」	
	第4時	もう一度校庭で秋を見つけよう	
第2次	もっとあきを見つけよう		手立て①②
	第5時	校庭のほかに、どこで秋を見つけられるかな	
	第6時	学校の周りでもっと秋を見つけよう	
	第7,8時	見つけた秋を、振り返ろう	
第3次	あきのおもちゃづくりをしよう		手立て①
	第9時	おもちゃ作りの計画書を書こう	
	第10,11時	秋の宝物を変身させて、おもちゃを作ろう	
	第12時	みんなで遊んで、気付いたことを伝え合おう	
第4次	みんなであそべるあきのおもちゃづくりをしよう		手立て①②
	第13時	班でおもちゃ作りの計画書を書こう	
	第14~16時	班で力を合わせておもちゃを作ろう	
	第17時	みんなで遊んで、気付いたことを伝え合おう	
第5次	6年生がよろこぶあきのおもちゃづくりをしよう		手立て①②③
	第18,19時	6年生が楽しめるように、おもちゃをレベルアップしよう	
	第20~22時	招待状を書こう	
	第23時	6年生と一緒にいあきまつりをしよう	
	第24時	あきまつりを振り返ろう	

5 研究の実践

(1) 手立て1 自然物と関わる場をもつ

本研究では、自然物に関わる場を大きく分けて2つ用意した。

① あきをみつけよう

本単元では、あきさがしを行うために運動場や学校周りへ何度も出向いた。第1時で、今は夏？秋？と尋ねたところ「運動場で夏か秋か確かめたい！」と答えた。この発言から外に出て秋を見つけることが始まった。「ただ見つけるだけだとつまらない」とつぶやいた子がいたため、子どもたちでビンゴカードを作ることになった。ビンゴカードの内容は、子どもたちがそれぞれ見つけたらうれしいなと思えるものを9つ書き、オリジナル『あきさがしビンゴ』を作った。言葉で項目を書く子もいれば、絵のみで表現する子もあり、個性あふれたビンゴカードが出来上がった(写真1)。ビンゴカードを作って秋を見つけに行くことにより、子どもたちが秋に関心を持ち、自然物と主体的に関わろうとする姿が見られることを期待した。

第2時では、自分のビンゴカードを持って校庭へ行き、各々で秋を探した(写真2)。子どもたちの思った以上に秋が見つかり、互に見つけた秋を嬉しそうに自慢する姿が見られた。「見つけたものを教室に持っていきたい!」「みんなに見せたい!」という子が多かったため、次の時間に、『3くみ はたとうあきじまん大会』を開くことにした。

『3くみ はたとうあきじまん大会』では、とっておきの秋を選ぶとき、一人では決めきれないといった子が多かったため、グループで相談してもよいことにした(手立て2)。資料1の子どもの会話から、グループで話すことにより、自分の見つけた秋を褒められて自信をもっている様子があった。その後の教師との会話の中で「小さくても、きれいって言ってもらえたのがうれしかったし、小さくてもいいんだと思って、びっくりした」と思いがけない発見にも繋がり、友達と関わり合って活動することで新たな気づきに結びついていることも分かった。また資料2より、A児は「学校にこんなにたくさん秋があるなんて知らなかった。自然がいっぱいだね。またみんなで秋を集めたい」と話した。子どもたちの興味や関心が、秋の自然物に向いてきたことが振り返りの様子から分かった。また、活動の中で子どもたちが、自分にも自然物をたくさん見つけることができるということに気づき、いきいきと活動に参加する姿より、気づきの質の高まりを感じることができた。

② あきのおもちゃづくりをしよう

あきみつけで集めた秋の自然物を使って、おもちゃ作りをすることにした。ただ木の実や葉を集めるだけでなく、子どもたちの気持ちがこもったおもちゃに変身させることで、さらに秋が好きになったり、子どもたちの可能性が広がったりするのではないかと考えた。子どもたちは、葉っぱの形やどんぐりの大きさなどの特徴を捉え、何が作れるかを丁寧に考えていた。それぞれお気に入りの木の実や葉を使い、



写真1 あきさがしビンゴ



写真2 あきさがし

- C1:C2 ちゃんのどんぐり、小さいけどきれいだね。どこで見つけたの?
- C2:体育館の近くで見つけたよ。
- C3:こんなきれいなどんぐり見つけられなかったよ!これを発表したらみんなすごいって言ってくれると思う!

資料1 子どもの会話

いつも遊んでいる運動場に、こんなに秋がたくさんあるなんて、知らなかった。はたとうは自然がいっぱいだね。もっとみんなで秋を見つけに行きたいな。

資料2 A児の発言

思い思いのおもちゃを作り上げた。

活動後の振り返りで B 児は、資料 3 より「はじめは上手にできるか心配だったけど、手を切らなくてよかった！がんばってつくったよ」と思ったことを記入した。他の子どもの振り返りでも「大切な秋の宝物を変身させられてうれしい」「自分がどんぐりごまを作れると思わなかったから、作れてうれしい！家で妹に遊んでもらいたい」と、おもちゃづくりを通して対象と関わることで、自分にできることを見つけたり、自分の可能性を広げたりしていることが分かる。自分で集めた秋の宝物がおもちゃへ変身していく過程で、自分にもおもちゃを作る力があるということに気付いたり、おもちゃを作り上げた自分への誇らしい気持ちを抱いたりし、自分自身への気付きへと気付きの質を高めてくることができた。

〈計画書を書いた後の振り返り〉

上手に作れるか、不安だな。

（おもちゃを作り上げた後の振り返り）

手を切らなくてよかった！がんばってつくったよ。

資料 3 B 児の振り返り

（2）手立て 2 友達と関わる場をもつ

あきさがしやおもちゃ作りでは、個人で活動した後に、班で活動する時間や自由にクラスメイトと関われる時間を設けた。繰り返し活動することで、子どもたちに自信をもたせ、友達との深い関わりに繋がることを期待した。

あきみつけでは、『3くみ はたとうあきじまん大会』を行った後、再度校庭へ秋を見つけに行った。1 回目のあきさがしでは、子ども同士の関わりは少なく、個人一秋の自然物の関わりだった。しかし、2 回目となると、一度経験したことがあるからこそ自信をもち、秋の自然物を通じて友達同士の関わりをもつことができる子どもが多く見られた（写真 3）。1 回目に見つけたものや見つけた場所を教え合ったり、「こんなところに黄色の葉っぱが落ちているんだ！すごいね！」と認め合ったりする姿を多く見ることができた。繰り返し活動を行うことで、子どもたちの自信に繋がっていることが分かる。そして、自信がもてたことによって、友達と関わることができ、関わりの中で「すごい！」「いいね！」が活動の中でたくさん聞こえてきた。このことから、友達と関わったからこそ自分のよいところを認めてもらい、一人では気付けなかったことに気付くことができたことが分かる。

また、おもちゃ作りでは、自分で作ったおもちゃをととても大切にしていたが、それと同じようにクラスメイトの作ったおもちゃも大切に遊ぶ姿があった。「○○ちゃんの作っていたどんぐりめいろが作ってみたい！」「○○くんの持っている松ぼっくりを使って一緒におもちゃを作ってみたいな」という声が多く出て、班でおもちゃ作りを始めることに決まった。初めて一人でおもちゃを作った時は、迷いながら計画書を作る姿があったり、思うように作れずに困っていたりする姿を多く見た。しかし、班で一つのおもちゃを作ることにしたため、みんなでアイデアを出し合ったり、大きな段ボールを班全員で協力して支えて切ったり、飾りつけしたりし、どんどんオリジナルのおもちゃを作り上げていった（写真 4）。協力したことで、一人で作った時よりも大きくて手の込んだおもちゃを作ることができた。D 児の振り返りでは、資料 4 より、「友達がいたからこそ、大きな作品が作れた！」と、班の仲間に



写真 3 見つけたどんぐりを嬉しそうに教師と友達に自慢する C 児



写真 4 班で協力しておもちゃ作りをする子どもら

感謝する気持ちや仲間のよいところに気付いていることが分かる記述が見られた。他の子どもの振り返りでは、「E 児がいろいろかざりつけをしてくれたから秋っぽいおもちゃを作ることができた」「女の子ががんばってくれた。ほんとうにありがとう」など、友達に関する記述をし、よいところを見つけ、認める姿があった。また、「F 児をたすけて、いっしょにがんばることができた」「ぼくの宝物をたくさん使っておもちゃを作ることができてうれしい」など、自分のよいところやできたことに注目して振り返りを書く子どももあり、友達と関わることで自分自身について気付くことができたと考えられる。



資料4 班でのおもちゃ作り後のD児の振り返り

(3) 手立て3 6年生と関わる場をもつ

班でおもちゃを作り、クラスの中であきまつりを行った後、教師が「次はだれに遊んでもらいたい？」と尋ねたところ、親や他のクラスの1年生など様々な意見が出たが、一番多かったのは6年生という意見だった。1年生にとって6年生は4月からお世話になっている、頼りになってあこがれの存在である。どうしてか尋ねると、「いつも優しくしてくれるから、ぼくたちも優しくしたい」「いつも遊んでくれるから、私たちのおもちゃで遊んでもらって楽しい気持ちになってほしい」という発言があった。普段の6年生との関わりや、子どもたちのワクワクした表情から、上級生と関わることによって子どもたちの可能性が広がるのではないかと期待し、機会を設けた。

作ったおもちゃで6年生を招待できるか尋ねたところ、もっとレベルアップしたいとなったため、おもちゃを改良することになった。クラスで行ったあきまつりを振り返り、「よかったこと」と「次はこうしたいな」と思ったことを班のみんなで画用紙に書き出した。「楽しく遊んでくれたけど、説明をもっと上手にやりたいな」や、「もっと難しくしないと、6年生はつまらないよな」といったことを話題にし、子どもたちなりに話し合いを進めていった(写真5)。すぐろくを作った班が、時間内に遊び終えられず悔しい思いをしていたが、話し合いをしたことでマスを減らしたり、止まったマスで起こるイベントを簡単なものに変更したりと、工夫をすることができていた。対象が6年生ということで少し苦戦をしていたが、それ以上に楽しんでもらいたいという気持ちが強く、子どもたちは粘り強くあきまつりの準備を行うことができた。相手が上級生であっても、いつもお世話になっている存在であれば、子どもたちは自分たちも持っている以上の力を発揮することができることが分かった。



写真5 よかったことを班で話し合い、画用紙に書き合う様子



写真6 あきまつりで6年生と関わっている様子

気持ちを込めて招待状を書き、自分たちで6年生の教室へ行き、招待状を渡す姿は堂々としており、成長が感じられた瞬間だった。あきまつりでは、6年生をもてなすために丁寧にルールを説明したり、遊んでいる6年生に「上手ですね」「こうするといいよ」など声をかけたりする姿が見られた(写真6)。前に立って話をするのが苦手な子も、この日のために一生懸命準備したという自信や、仲間の助けがあるという安心感から、6年生にルールの説明をすることができていた。あきまつりの後の振り返りでは、「いつも話せないけど、今日は話せたからよかった」と記述しており、自分自身について振り返って成長を感じることができていた。

6 研究の成果と課題

(1) 手立てについての成果

手立て1では、校庭や通学路の身近な自然に直接触れ、実りの秋を感じることができた。直接身近な自然に触れることで、ときめきを感じて子どもたちが進んで活動に参加する姿が見られた。また、自分が大きなドングリを見つけられたという経験から、「自分にもできた・見つけられた」という強い自信に繋がり、その後の活動にもチャレンジしてみようという気持ちを高めることができた。そして、本単元以前の生活科学習と比べると、直接触れて、見て活動することにより、子どもたちが夢中になって活動に取り組む姿が見られた。子どもたちが主体的に活動に取り組むことによって、その後の振り返りが充実したように感じた。振り返りによると、「いっぱい落ち葉が見つけれられて、うれしいな」「ちょっとしか見つけられなかったけど、かわいいのを見つけれられた」など、対象を通して自分のことに触れており、手立て1は有効であったと言える。

手立て2では、あきさがしやおもちゃ作りを友達と行うことで、子どもたちの新たな気付きや経験に繋げることができた。初めてのことでなかなか自信がもてなかった子も、今回は繰り返し活動を行ったこともあり、2回目の活動では自分から自信をもって自然物や友達に関わりに行くことができ、大きな成長を感じることができた。また、1回目の時には気付かなかったことに2回目で気付くことができた子どももいた。友達と関わり合うことで、友達のよさを知るだけでなく、自分自身のよいところに気付き、喜びを感じている子どももいたため、友達と関わり合う場を設けることは自分自身に気付くことに繋がると感じた。班でのおもちゃ作りの振り返りでは、「G 児が、説明してくれて（うれしかったよ。）、ありがとう」と書かれており、それを見た G 児が、「わたしは説明ができるんだなと思ったよ」と振り返っていた。自分一人では気付くことのできない自分に、他者との関わりの中で気付くことができていたため、手立て2の関わり合う活動は有効であった。

手立て3では、身近な6年生を対象とし、気持ちを込めて活動に取り組む姿から、手立て2をより有効にしていたと感じた。6年生に楽しんでもらいたいという気持ちももてたからこそ、子どもたち同士で力を合わせ、おもちゃをレベルアップすることができ、憧れの存在に対する子どもたちの可能性を感じた。そして、6年生の存在があったからこそ子どもたちは互いに高め合うことができ、自他ともによさを発揮し、見つけ、認め合うことができた。

(2) 課題

1年生ということもあり、子どもたちの発言や振り返りを通して、教師が見取る場面が多く、正しく見取ることが難しいと感じた。また、振り返りを行うにあたり、気持ちを言葉にする力や、思ったことを伝える力などの言語力・表現力を養っていく必要を感じた。今後は、生活科ならではの気付きを、言葉や絵、劇などで表現する経験を多く与えるなど、表現活動にも注力していきたい。最後に、生活科は子どもたちの興味・関心を主軸として、対象と直接関わることにより学習活動が成立すると考える。子どもたちが主体的に活動に取り組むためには、学習の中で子どもたちが意思決定できる機会を設定し、子ども自身で学びを豊かにしていける授業づくりが行えるようにしていきたい。子どもたちのように、私自身も自然や人との関わりを大切にしながら学び続け、生活科教育での実践を行っていきたい。